

マルコ 2・1-12

今日の福音は、「数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると・・・」という、うっかりすると聴き洩らしてしまう、何気ない調子で語り始められます。けれども、イエスのみ業の進展を語るマルコ福音書は、今日の福音をこのように語り始めることによって、私たちに重要なことを告げようとしているのかも知れません。

イエスのみ業はカファルナウムの会堂で開始されたのでした。この数週間の年間主日のミサの中で私たちはマルコ福音書の一章に語られている、カファルナウムの会堂から開始されたイエスのみ業を語る福音を味わって来ました。そして、今日の福音で私たちはもう一度、マルコ福音書に語られているイエスの足跡をたどってカファルナウムに戻るのです。このことにはどのような意味が込められているのでしょうか。

あの最初の安息日が終わった夕暮れに、ペトロの家の戸口には町中の人々が、病気や悪霊に苦しめられている大勢の人々を連れて押し寄せて来たのでした。イエスはその人々の病気を癒し、悪霊を追い払ってくださいましたが、その翌朝には、それらの人々を後に残して、神の国の福音を宣べ伝えるために弟子たちを連れてガリラヤの他の町や村を巡り歩く旅に出られました。

先週の福音では、その道の途中、重い皮膚病を患っている人の切ない願いに心打たれたイエスがその人を癒し清めてくださったことが語られていました。けれども、不思議に思えるかもしれませんが、イエスはその人に対して、このことを他の誰にも言ってはならないと厳しく注意されて、祭司のもとに行くようにとお命じになりました。それは、律法の掟にしたがって、清められた感謝のいけにえを捧げさせるためです。しかし、その人はイエスの厳しい口止めにもかかわらず、イエスのもとから立去ると、早速自分の身に起こった奇跡のみ業を大いに言い広めたのです。「それで、イエスはもはや公然と町に入ることが出来ず、町の外の人のないところにおられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集った。」と先週の福音は締めくくられていました。

このようなマルコ福音書の語り方を聴いていると、イエスは何故か人々を避けておられるような印象を受けます。イエスは確かに人々の求めに応じて、奇跡のみ業を行ってくださいますが、尚も奇跡を求める人々の願いを知りつつも、独り人里離れたところで祈りをささげ、奇跡のうわさが広がることを恐れるかのように、口止めされています。それでも、そのことが言い広められると、町の外に留まり続けられるのです。イエスが行われた奇跡のみ業を伝え聞いた

人々が、奇跡を求めてイエスのもとに群がるようにして集ってくることはイエスの本意ではないということを、マルコ福音書は語ろうとしているようにも思えます。

イエスが悪霊を追い出されたとき、「イエスは悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。それは、悪霊がイエスを知っていたからである」とマルコ福音書は語っていました。奇跡を求めてイエスのもとに群がるように集ってくる人々の中に、イエスは悪霊が暗躍しているのをご覧になっていたのかもしれませんが。悪霊はイエスが神の子・メシアであることを知っていたのです。けれども、イエスが父なる神から託された使命は、悪霊の誘いに乗って、奇跡によって人々を集め、人々の熱狂の中でメシアに祭り上げられることではなかったのです。だから、イエスは悪霊にものを言うことを許さず、奇跡のうわさが広がることをお望みにならなかったのです。

そのイエスは今日の福音では弟子たちを連れて再びカファルナウムに戻っておられます。このような場面設定によって今日の福音は、カファルナウムから始まったイエスのみ業が何を指すものであるかを語ろうとしているように思えます。

イエスのみわざが開始されたあの夕暮れの情景を思い起こさせるかのように、この日も、イエスのおられる家の戸口まで隙間もないほどに、大勢の人々がイエスのもとに集って来ました。そこへ、中風を患っている人が、床に寝かされたまま担がれて来たのです。何とかしてこの病人をイエスのもとに運ぼうとした人たちは、屋根をはがして床に寝かせたままこの人をイエスのおられるあたりにつり下ろしたのです。そこで起こったことは、これまでと同じように、床に寝たまま担がれてきた人が人々の目の前で癒され、床を担いで帰って行ったというイエスの奇跡のみ業です。しかし、この奇跡のみ業を語る今日の福音には新しい響きが響いています。それは、イエスがあの人に告げた「子よ、あなたの罪はゆるされる。」というみことばです。イエスはこのことを告げるために、もう一度そのみ業の出発点であったカファルナウムに立ち戻られたかのようにです。

そこには、これまで姿を見せなかった律法学者たちが登場します。「この人は、何故こういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神お一人のほかに、一体誰が、罪をゆるすことができるだろうか。」律法学者たちはこのように考えたのでした。そして彼らの心の中のこのつぶやきは、事柄の的を射ていたのです。彼らの心のうちを見て取ったイエスは言われます。「何故、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に、『あなたの罪はゆるされる』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪をゆるす権威を持っていることを知らせよう」と言われてイエスはあの中風の人を癒してく

ださったのです。不可能を可能にするイエスの奇跡のみ業は、罪をゆるすことがお出来になる絶大な神のあわれみの力の発露であったのです。奇跡を求めてイエスのもとを訪れる人々の願いに応えながらも、イエスが目指しておられたのは、そのようなことであったのです。イエスのうちに働く力は、罪をゆるすことが出来る神の大なるあわれみの力であることを、イエスは人々に受け止めてもらいたかったのです。イエスにおいて罪をゆるすことができる神のあわれみが人々にもたらされていることを信じて受け入れてもらいたかったのです。イエスの奇跡のみ業はこの一点に向けられていたのです。そのために、イエスはそのみ業を開始された出発点であるカファルナウムに戻られて、人々にそのことを告げておられるのです。

イエスのみ業が開始されたあの時と同じように、イエスが奇跡を行ってくだされば私たちもそのイエスの後を追いつくことなのでしょう。しかし、イエスが神の大なるあわれみの力をもって、私たちに罪のゆるしをもたらしてくださっていても、私たちにはその恵みのありがたさが今一つピンと来ていないかも知れません。そんな私たちも、あの人々と同じように、イエスが私たちに求めておられることを脇において、いたずらに奇跡を願い求めてしまいがちです。けれども、それでは、たとえ奇跡が起こっても、私たちはどこまで行ってもイエスと出会うことは出来ないのです。私たちの信仰はイエス・キリストの十字架と復活によって私たちの罪がゆるされたことを信じる信仰です。洗礼によって、私たちの罪がゆるされたことを信じる信仰です。けれども、罪がゆるされるということを、私たちはどのようなこととして理解しているのでしょうか。そもそも、罪ということをごどのように理解しているのでしょうか。

今日の福音の中風の方は、自分の罪を悔いて、イエスによって癒していただいたわけではありません。むしろイエスによって癒していただいたときに、イエスがどのように言ってくださったことによって、自分が願い求めたことをはるかに越える恵みのあることを知ったのです。そしてその恵みの中で、イエスによって癒していただいたことを知ったのです。罪は、それがゆるされた時に、自分の罪がゆるされていることを私たちが知る時に、何である分かるのです。そしてその時、私たちは自分がどのような罪の中から救われたかを知ることが出来るのです。そのような罪のゆるしを経験したいと思います。そのために、今日もイエスの十字架の死と復活を記念するこのミサの中で、私たちに与えられた神のあわれみによる罪のゆるしを、そのことによって知った私たちの罪の姿を見つめて行きたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高